

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

能・歌舞伎「外」の世界も芸の肥やし

伝統芸能の世界にも慶応高校（塾高）出身者は少なくない。

世界的に有名な能楽師坂井音重（75、1959年卒）もその一人。授業が終わって帰宅すれば、能の稽古をする毎日だったが、そんな中で外の世界にもふれた。休日には友達と銀座や渋谷



能の国際化を進める坂井。自宅の能舞台で

慶応高校 ⑧

に映画を見に行った。通学の電車から見る木々の葉の移り変わりに「わびさび」を感じた。

高2の夏、友達と3人で「みんな行かない場所に行こう」と静岡・戸田の民宿に泊まった。海水浴をしたり、油絵を描いたり、それぞれ思い思いに過ごした。当時はやっていた映画や文学について夜通し語り合った。「自分で考えて自由に行動した10日間。貴重な体験でした」

歌舞伎俳優の中村時蔵（60、75年卒）は高1の時に留年し、塾高に4年間通った。18歳だっ

た高2で車の運転免許を取り、友達と一緒に箱根のワインディングロード（曲がりくねった道）などを走ったという。「いま考えると、野郎ばかりで何が楽しかったのかなあと思いますが」と笑う。当時の交友関係や経験は、いまの芸に生きている



「当時の友人は時々、芝居を見に来てくれる」と中村

という。「あの自由な雰囲気です。育ってほしい」と、歌舞伎俳優の長男梅枝（27、2006年卒）と次男萬太郎（26、08年卒）も塾高に通わせた。

歌舞伎俳優の市川右近（51、82年卒）は高3の時、芸の師匠のヨーロッパ公演に付いていった。観客の万雷の拍手に、世界に通じる歌舞伎のすごさを感じたという。「これから俺は歌舞伎をやっていくんだという、う



「高校時代はよくディスコに通った」と市川

れしさと責任感を感じました」。一方で、塾高時代は歌舞伎の世界を外から俯瞰して見られたのが大きかったという。友達から「なぜ歌舞伎をやっているのか」と聞かれ、歌舞伎がまだまだ一般には浸透していない現実も知った。

松竹会長で歌舞伎座社長の大谷信義（70、64年卒）は、3年の時に担任だった先生が強く印象に残っている。普段は温厚だ



「のんびりした3年間で」と振り返る大谷

ったが、同級生が教育実習の女子大学生をからかった時は烈火のごとく怒った。そして「人間として、弱い立場の人をからか

ってはいけない」と諭した。「先生からは、人間性を大切にするといいことを学びました」

坂井は11月15日、長野・伊那の伊那文化会館で公演がある。中村は12月に京都四條南座、来年1月には国立劇場で公演の予定。市川は11月25日まで新橋演舞場で「スーパー歌舞伎Ⅱワンピース」に出演中。松竹は創立120周年祭を開催中で、東京・銀座の「東劇」で往年の名作の特集上映をしている。